

久光の手紙には、当時、流行していた麻疹はしかのような病にかかっていないか心配していること、於成に対しては、欲しがっていた人形を送ったが、あれでよかったか、気に入らなければまた別のものを贈るがいかか、などと綴つづられており、優しい父親としての一面を伺うことができます。つまり、今回の於成の手紙は、父・久光の手紙と贈り物へのお礼の手紙なのです。前置きが長くなりましたが、古文書解読の際にはこのような事前の情報が、糸口になることがあります。

それでは、最初から読んでいきましょう。①行の最初の4文字 **おめでたく** は「御めて度」と読みます。当時の人々の手紙や日記には「めでたく」という文言が頻出します。この手紙の最後にも **めでたくな** (めで度かしく)と

あります。特にどう現代語訳するわけでもなく決まり文句として扱います。その次

の **あとのほう書有難** は「両度 ご(おん) しよ ありがたく 御書有難」(再度のお手紙あ

りがとうございます)と読みます。ここからも、先に父・久光からの手紙が鹿児島城二之丸の於成に届けられたことがわかります。なお、黎明館所蔵の久光とその家族の動静や贈答に関することを記した『奥日記(日帳)』をめくると、六月十三日条に「今日 すゝき字左衛門事 京都より着いたし、こなたへも出、御機嫌の御左右御(二之丸) 委 申上、右御便りニ 御書 御前より 悦之助様御初 都之城御初 御惣方様 (於治) 申上候事」とあり、この「御書」がそれではないかと思われま

す。②行「まつく」から⑤行「申上まいらせ候」まではすでに触れましたので、**お**

(さて 扱)以降を。 **いひのうらみいふべき者** は「此内かけ人形いたゝき有難」と読みます。於成が久光から贈られてきた人形のお礼を言っている部分になります。 **いひの「け」と読むかなは、「介」をくずした** **いひの「た」は「多」** をくずした **いひ** です。ところで、久光が贈った人形はどんな人形だったのでしょうか。

今回はそれを考えてみたいと思います。